



‘Be Feminine, Be a Soldier’ : Gendered Dynamics of Military Service in Second World War Britain

Toshiko HAYASHIDA

This study examines the gendered dynamics of military service by analysing the roles and representations of women assigned to support duties in Britain during the Second World War. Although women were legally granted military status in 1941, their responsibilities remained confined to non-combatant tasks such as clerical work, transport, and communications. Recruitment campaigns cultivated the image of the ‘feminine soldier’, presenting military service as an extension of domestic roles through posters and advertisements in women’s magazines. The Auxiliary Territorial Service, in particular, targeted ‘ordinary’ young women, promoting the continued preservation of the masculine identity within the armed forces. Drawing on recruitment posters, official policy documents, and testimonies from male soldiers collected by Mass Observation, a social research project established in 1937, this study demonstrates how women’s mobilisation into the military was mediated by the imperative to maintain femininity. Despite their formal status as soldiers, women were consistently framed as auxiliaries, reinforcing wartime gender hierarchies rather than challenging them. Their participation was not only functional—intended to free men for frontline service—but also symbolic, preserving the gendered boundaries of military identity. This analysis highlights the paradox of gender integration in wartime: women were permitted to serve only to the extent that they remained recognisably feminine. Their mobilisation was not merely a logistical response but a political and cultural process that simultaneously restructured and reinforced gender norms within the military institution. Moreover, the presence of female soldiers ultimately contributed to the consolidation of homosocial male solidarity within the ranks.

「女らしく、兵士であれ」 —第二次世界大戦期イギリスにおける軍務のジェンダー構造—

林田 敏子

はじめに

ロシアによるウクライナへの本格的な軍事侵攻が開始される約8か月前の2021年7月、すでに緊張が高まっていたウクライナで、旧ソ連からの独立30周年を記念する式典の予行演習が行われた。ウクライナ国防省が報道用に公開した写真には、迷彩柄の帽子とズボン、カーキ色のTシャツを着た女性兵士が、高さ5センチ近くはあろうかという黒いハイヒールを履いて行進する様子が写っていた。イギリスの新聞『ガーディアン』は、「愚かだ——女性兵士がヒールで行進させられ、ウクライナで怒り爆発」という見出しとともに、ハイヒールの着用強制に対し、国会議員らが抗議の声を上げていると報じた¹。国内外から巻き起こった批判に対し、ウクライナ軍は「ハイヒールは軍の規定服を構成する装備品の一部である」と弁明したものの、約1か月後に開催された軍事パレードでは、女性兵士はハイヒールではなくアーマーブーツを履いて行進した。

軍の装備品としては明らかに機能性に欠けるハイヒールが女性兵士に支給された事実は何を物語っているのだろうか。そこには、「女らしさ」を保持したまま、女性を軍隊に取り込もうとする政府や軍の思惑が潜んでいた。ハイヒールは、女性が軍隊という男性の領域に参入しても、けっして「女らしさ」を喪失したわけではないことを視覚的に示すものだったのである。この騒動は、女性兵士の存在が珍しいものではなく、軍隊内のジェンダー主流化が進む現代においてもなお、女性を軍事動員する際に、「女らしさ」の保持がいかに大きな問題であり続けているかを示している。臨戦態勢にあったこの時期のウクライナにおいて、女性兵士、なかでもハイヒールに象徴される若い女性の存在は、軍員増強という物理的な必要性を満たすだけのものではなかった。本来、男性に守られるべき女性に志願入隊させることで、男性は戦いへと駆り立てられ、軍隊の「男らしさ」は一層強化された。だからこそ、女性は兵士になることで男性化してはならず、守られる性として「女らしさ」を保持することを期待された。その象徴的な役割を果たしたのがハイヒールだったのである。

「軍事主義 (militarism)」あるいは、それが社会に浸透していく過程を重視する「軍事化 (militarisation)」という概念は、国家が軍隊を保持することや、争いごとの解決策として軍事力を行使することを自然視し、それを促進するイデオロギーのことである。軍事主義/軍事化がしばしばジェンダー化された形をとることは、シンシア・エンローをはじめとする研究者によって指摘

1 “Idiotic’: Fury in Ukraine after female soldiers made to march in heels’, *The Guardian*, 3 July 2021, <https://www.theguardian.com/world/2021/jul/03/idiotic-fury-in-ukraine-after-female-soldiers-made-to-march-in-heels> (2025年11月21日参照)



されてきた²。有事の際には、弱い人々を守るために戦う者は「男性化」され、軍事力の行使に関わらない者、保護されるべき者は「女性化」される。佐藤文香は、軍事主義が男性性／女性性という観念の操作を通じていかに戦争を駆動するか、また、女性兵士の存在やそのイメージが、実は「未完の構築物」にすぎない軍事的男性性をいかに支え、強化しているかを、日本の自衛隊を例に明らかにしている³。本稿では、こうした先行研究と議論の土台を共有しつつ、「女性兵士」という概念を軍隊の非戦闘任務を担った女性にまで拡大することで、「軍隊のジェンダー化」という現象をより広い視点から歴史的に考察する。

歴史上、大規模な女性の軍事動員が初めて行われた両大戦期においては、女性を正規軍の戦闘員として採用したソ連のような例外をのぞいて、ほとんどの交戦国が女性に戦闘資格を認めていなかった。仮に戦闘任務を遂行することを「兵士」の要件とするならば、両大戦期には、一部の例外をのぞいて女性兵士は存在しなかったことになる。たとえば第二次世界大戦中に60万人もの女性を軍隊に動員したイギリスでは、女性は戦闘に従事することを禁じられ、武器をもって戦う戦闘員（combatant）には含まれなかった。しかし、開戦から2年後の1941年4月には、女性は軍の正規の成員として「軍人／兵士（soldier）」の地位を与えられ⁴、同年12月には徴兵法の適用対象にもなっている⁵。そもそも軍隊の中には医療、通信、物資輸送、車両の運転、事務など無数の非戦闘職があり、女性だけでなく男性もまたこうした任務に従事していた。それにもかかわらず、軍隊でも、また社会においても、男性の非戦闘員は「兵士」として認識され、女性の非戦闘員とは区別してとらえられた。実際は、軍隊の中で「男は戦う」、「女は戦わない」といった性別による線引きはできないにもかかわらず、軍隊は「戦う男」と「戦わない女」という形でジェンダー化されていたのである。女性を軍事動員する際に「女らしさ」の保持が問題になるのは、まさにこうした文脈においてである。以下、本稿では、身分上は男性兵士とまったく同じ扱いを受けた第二次世界大戦期のイギリスにおける軍隊の女性たちを、広い意味での「女性兵士」ととらえた上で議論を進めたい。

第二次世界大戦期のイギリスでは、深刻な軍員不足を背景に大規模な女性の軍事動員が行われた。女性を総力戦の象徴として戦意高揚に利用しようとする政府や軍と、戦争協力によって女性の社会進出を推し進めようとする女性組織の思惑が一致したことで、リクルートはさしたる抵抗もなく迅速に進められた。しかし、本来「男の領域」である軍への女性の参入は、前線と銃後という形で線引きされた戦時のジェンダー構造を揺るがしかねないものであり、軍隊内のジェンダー秩序をいかに保つかが大きな課題となった。以下では、まず、第二次世界大戦期のイギリスにおいて、女性の軍事動員がどのように進められ、軍のジェンダー秩序を維持するためにどのような試みがなされたのかを概観する。次に、女性向けの募集ポスターや広告の分析を通して、軍隊や軍務がいかに「女性化」された形で提示されたのかを明らかにする。さらに、女性兵士が軍隊のなかでどのように受け止められたのかを、世論調査組織「マス・オブザベーション（Mass Observation）」が収集した男

2 シンシア・エンロー（佐藤文香訳『策略 —女性を軍事化する国際政治』岩波書店、2006年。

3 佐藤文香『女性兵士という難問 —ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学—』慶應義塾大学出版会、2022年。

4 The National Archives [TNA], WO 32/10027, Women's Service Auxiliary Territorial Service, The Defence (Women's Forces) Regulations, 1941.

5 女性徴兵の導入過程については、拙稿「『女性兵士』はいかにして可能になったか —第二次世界大戦期イギリスにおける女性の軍事動員—」『女性史学』第25号、2015年。

性兵士の「声」を手がかりに探っていく。女性兵士の存在は軍隊という「男の世界」にどのような作用を及ぼしたのか。男性兵士が女性兵士に向けたまなざしを通して考えてみたい。

第1章 女性の軍事動員

1939年9月、ドイツ軍によるポーランド侵攻によって第二次世界大戦が始まった時点で、イギリスでは陸・海・空軍それぞれに女性部隊が創設されていた。女性部隊創設の目的は、非戦闘任務に就いている男性を戦闘員として前線に送り出すことであり、その任務は、事務、電話交換、軍事物資の運搬、車両の修理や運転、そして掃除や洗濯、調理といった家事労働で構成された。資料1は陸・海・空3つの女性部隊の人員数の推移を示したものである。3部隊の総人員数が最大の45万人に達した1943年9月時点で、イギリス軍全体に占める女性兵士の割合は9.39%にのぼった。この数値は、アメリカ、ドイツ、そして戦闘員を含め最も多くの女性兵士を擁していたソ連をも凌

資料1 女性部隊の人員数の推移

年	月	陸軍	空軍	海軍
1939	12	23,900	8,800	3,400
1940	3	-	8,900	4,400
	6	31,500	11,900	5,600
	9	36,100	17,400	7,900
1941	12	36,400	20,500	10,000
	3	37,500	27,000	12,300
	6	42,800	37,400	15,100
1942	9	65,000	64,100	18,000
	12	85,100	98,400	21,600
	3	111,100	110,800	24,800
1943	6	140,200	125,700	28,600
	9	162,200	141,500	33,500
	12	180,700	166,000	39,300
1944	3	195,300	180,100	45,000
	6	210,300	181,600	53,300
	9	212,500	180,300	60,400
1945	12	212,500	180,300	60,400
	3	206,200	175,700	68,600
	6	199,000	174,400	73,500
1945	9	198,200	171,200	74,000
	12	196,400	166,200	73,400
	3	195,300	159,700	73,200
	6	190,800	153,000	72,000

出展：Jeremy A. Crang, *Sisters in Arms: Women in the British Armed Forces during the Second World War*, appendix1, 2020.

ぐものであった⁶。

開戦から2年後の1941年12月には、徴兵法の適用範囲が女性にも拡大され、20歳から30歳の独身女性および子どものいない寡婦が陸・海・空の女性部隊か民間の防衛組織、軍需工場に強制動員されることになった⁷。最初に強制動員の対象となったのが20歳から22歳の若い女性であったことから、女性兵士にはしばしば「ガール」という呼称がつけられた⁸。この言葉には、若さや新しさといったポジティブな意味も込められていたが、真剣な戦いの場にはそぐわない存在として、その役割を軽んじる社会風潮も反映されていた。

女性に正規の兵士としての身分が付与された第二次世界大戦期のイギリスでは、「男の領域」としての軍隊を守るため、徹底したジェンダー秩序の維持が図られた。まず、女性を既存の軍隊組織に直接動員するのではなく、新たに女性部隊を設けることで、指示系統は男女で明確に分離された。また、女性に与えられる給与や軍事恩給は男性の3分の2におさえられた⁹。軍隊におけるジェンダー秩序を維持

6 Beate Fieseler et. al, 'Gendering Combat: Military Women's Status in Britain, the United States, and the Soviet Union during the Second World War', *Women's Studies International Forum*, 47, 2014, p. 116.

7 5&6 Geo. 6, c. 4, The National Service (No. 2) Act.

8 杉村使乃『制服ガールの総力戦 —イギリスの「女の子」の戦時貢献—』春風社、2021年。

9 TNA, LAB8/388, Intensive Recruiting Campaign for the Auxiliary Territorial Service, Ministry of Labour and National Service Registration for Employment Order, 1941, 13 June 1941, p. 2; Harold L. Smith, *Britain in the Second World War: A Social History*, Manchester: Manchester University Press, 1996, p. 13.



する上で最も重要だったのが、「女性は戦闘任務に従事してはならない」というコンバット・タブーであったが、1941年4月には、敵機の迎撃を任務とする防空部隊に女性が入隊することが認可される。男女混成の防空部隊は、陸軍砲兵隊と陸軍女性部隊の兵士によって構成された。防空部隊は国内だけでなく海外にも展開したため、女性兵士の任務は典型的な非戦闘職の枠に収まりきらなくなり、戦闘任務の定義や防空部隊の役割分担をめぐる、議会でも論争が起こった。最終的には、敵機の高度・距離・角度の測定、追跡、照準の設定までを「非戦闘任務」とし、高射砲の発射のみを「戦闘任務」とすることで、防空部隊における軍務はジェンダー化された¹⁰。このように、女性兵士は迎撃作戦の一翼を担いながらも、高射砲の発射には関与しないとする事で、コンバット・タブーは形式的に保持されたのである。

また、防空部隊への女性の配属は志願者に限られ、迎撃任務を女性に強制することは慎重に回避された¹¹。男女混成の防空部隊で活躍する女性兵士の象徴的存在となったのが、当時の首相ウィンストン・チャーチルの末娘メアリである。彼女の高貴な出自、整った容姿、そして入隊時18歳という若さが、防空部隊に志願する女性のイメージアップと「女らしさ」の保持に一役買った。また、高射砲隊、とりわけ男女混成の防空部隊に配属された男性の多くは、リクルートされたばかりの新兵や、前線勤務に適さない年長者、徴兵検査で最上位のA1に不適格とされた者で構成された¹²。こうして、女性とともに任務に就く男性がいわば「二軍」として位置づけられることで、迎撃を任務とする部隊に女性が参入することの衝撃は緩和された。同時に、男の中の「二軍」の存在は、最前線で戦う兵士たちの「男らしさ」を相対的に強化する役割も果たしたのである。

第2章 募集広告の中の「女性兵士」

女性が兵士としての法的地位を獲得し、男性にのみ課されていた戦闘任務に極めて近い領域にまで「進出」した第二次世界大戦期、女性の軍事動員にはいかなる特徴が見られたのだろうか。以下では、陸軍女性部隊(The Auxiliary Territorial Service: 以下ATS)の募集広告を手がかりに、軍が女性たちに対してどのような働きかけを行い、どのような役割を期待していたのかを探ってみたい。ATSは海軍や空軍の女性部隊に比べて、より多くの人員を必要としていたにもかかわらず、3つの部隊の中でひとときわ人氣が低迷していた。そのため、巨額の費用を投じた大規模なリクルート・キャンペーンが実施されている¹³。ATSの主たる宣伝媒体となったのは、多色刷りのポスターと、女性たちが日常的に読むと想定された日曜紙や夕刊紙、そして女性雑誌に掲載された広告であった。

募集広告がまず女性に訴えかけたのは、戦争に勝利するため、また、戦争を短時間で終わらせる

10 男女混成防空部隊のなかで戦闘行為がいかに再定義されたかについては、拙稿「軍事作戦とフェミニニティ —第二次世界大戦期イギリスの男女混成防空部隊—」『ジェンダー研究』25号、2025年。また、特定の職種が女性化していく過程とそこに生じるジェンダー・ポリティクスを論じた貴重な研究として、石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか —技術とジェンダーの日独比較社会史—』ミネルヴァ書房、2018年。

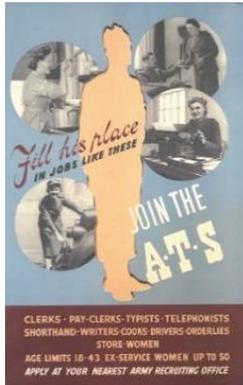
11 *Hansard, House of Commons, 5th Series, vol. 376, 9 December 1941, col. 1420.*

12 *Fieseler et. al 2014, p. 120.*

13 TNA, T162/1006, The Letter from the Ministry of Labour and National Service to the Ministry of Information, 29th August 1941.

ために、男性を前線へと「解放」する必要があるという点であった。資料2は男性に代わって非戦闘任務を担ってほしいと呼びかけるポスターであり、人型のパズルのピースで表現された「空白の男性」の背後に、調理や給仕、タイピングや車両の点検などを生き生きとこなす女性たちの写真が配されている。また、資料3は複数の女性雑誌に繰り返し掲載された募集広告で、「あなたが躊躇している間、彼は女性でもできる仕事に縛られている」というメッセージとともに、氏名・年齢・住所を記入するだけの簡易な入隊申込書が印刷されている。

資料2



資料2：Imperial War Museum [IWM], PST14578.

資料3



資料3：Mass Observation [MO], Topic Collection [TC], 32-2-B, ATS recruitment advertising, p. 745.

緊急性を訴えるかける際に、しばしば利用されたのが他国との比較である。上流階級向けのファッション雑誌『クイーン』に掲載された「時代遅れ」と題する募集広告には、流行りのファッションに身を包んだ品のよい女性の写真の下に、次のような文章が添えられている。

あなたは自己満足と無思慮にまみれながら、自分本位の考え方で利己的な人生を送っていないだろうか。そうであるならば、あなたは危険なほど時代遅れだ。あなたには想像力というものがない。スラックスとスモックを着たロシアの女性たちは塹壕で戦っている。オーバーオールを着たドイツの女性たちは、男たちと肩を並べてイギリス侵攻のための脛を作っている。あなたの居場所は陸軍にあるのであり、迫りくるドイツの脅威に対して、我々の軍隊を強化する手助けをしなければならない。あなたはまだ戦争に関連した職業を選ぶことができる。ATSに入りなさい。天職に、そしてキャリアになる。もうすぐ、その選択肢はなくなるかもしれない。時間は迫っている。¹⁴

時代の最先端を行く流行のファッションも、ロシアの女性が着用しているスラックスやドイツの女性が履いているオーバーオールに比べると「時代遅れ」でしかない——そう断じるこの広告は、有名なファッション雑誌に掲載されることで、若い女性たちに強いインパクトを与えたと考えられる。さらに、ドイツの女性がイギリス上陸の準備をしていることや、「今ならまだ自分で職業が選べる」という点を強調することで、女性たちの不安と焦燥感を巧みに刺激し、行動へと駆り立て

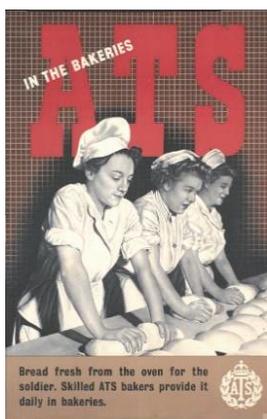
14 *The Queen*, December 3, 1941, p. 44. (MO, TC, 32-2-B, ATS recruitment advertising, p. 715.)



ようとする切迫した雰囲気演出されている。

ATSが最も苦戦したのは、慢性的な人材不足に陥っていた家事労働へのリクルートであり、その主なターゲットは労働者階級の若い女性たちであった。3人の女性が一列に並んでパンをこねる様子を描いたポスター（資料4）は、女性兵士の仕事が軍隊イメージとはかけ離れた「女らしい」ものであり、誰でも容易にこなせることを強調している。複数の新聞に掲載された募集広告（資料5）には、「ATSで幸せになれますか？」と問いかける若い女性の写真の下に、8つの質問が列挙されており、応募者は自分の興味のある項目を選択して送ることができるようになっている。質問の大半は、「兵卒、下士官の最高給与はどれくらいですか」、「食事、兵舎、娯楽、ゲーム、衣服について教えてください」、「3か月ごとに1週間の休みが取れるというのは本当ですか」といった、給与や休暇、食事、娯楽に関するものであり、規律が厳しいという軍隊への先入観を払拭しようとの意図がうかがえる。実際、この種の広告では「ATS」という文字以外に軍隊を想起させるような文言や視覚表象は一切用いられておらず、「通常の職業選択と何ら変わらない」という印象を与える工夫が凝らされている。

資料4



資料4：IWM, PST 14533.

資料5

資料5：Reading Standard - Friday 29 August 1941.
(MO, TC32-2-B, p. 742.)

ただし、女性兵士の任務が「誰にでもできる」ことを強調しすぎると、刺激に欠ける単調な仕事であるとの印象を与える恐れがある。女性の憧れを喚起し、入隊の動機づけを高めるためには、時代の先端に行くような、あるいは軍務の中核に関わることができるような職種を提示する必要がある。そこで、しばしば強調されたのが、軍隊経験で得られるスキルが将来、すなわち戦後も役に立つという点であった。家事労働には満足しない教養層を主なターゲットとした資料6のポスターには、ATSの様々な任務が戦後どのような職種につながるかが具体的に記されている。ポスターでは、防空部隊、敵機の電波を探知するラジオロケーション、調理、事務、運転の5つの職種が紹介され、距離測定器や高度測定器、高射照準算定機の操作経験は民間の航空会社で生かすことが可能で、電波探知の技術はラジオ・メカニクやエンジニアへの道を拓くとされた。また、高度と方位を計測する経緯儀にカメラを装着したキネセオドライブを扱う仕事については、写真技術を生かした職業に就く道が拓かれるほか、陸軍実験学校での訓練経験が研究職へのキャリアに結びつく可能性があると宣伝された。こうした最先端の職務に加え、ATSでの調理経験も、家政学や

栄養学の知識を得ることで、向上心のある「ガール」たちに調理師という選択肢を提示するものとされた。さらに、オフィスワークも、タイピング、速記、秘書業務、簿記など多様な分野に対応できる職種として紹介されている。資料7の広告では、「本当に…？」と尋ねる若い女性の姿を通して、ATSが資格をもつ科学者を必要としていること、高度な技術を有するタイピストには機密性が高い仕事が高給で与えられること、そして初心者でもラジオロケーションやキネセオドライトといった人気職種の訓練が受けられることが強調されている。

資料6



資料6：IWM, PST 14538.

資料7



資料7：Evening News, 16 August 1941.
(MO, TC32020B, p. 743.)

資料8



資料8：MO, TC32020B, p. 530.

女性兵士を募集するポスターでしばしば謳われたのが「平等な機会の付与」であった。図8は20世紀初頭に投石や放火といった戦闘的な手段がとられるまでに激化した女性参政権運動を引き合いに出し、女性たちに社会進出のチャンスが到来していると呼びかけるものである¹⁵。広告の左下には、女性運動家が通分から警官に強引に排除され、連行される様子が描かれている。かつての女性運動家たちが求めた「平等な機会」が、軍隊では階級や貧富の差、スキルの有無に関わりなく誰にでも等しく拓かれており、「可能性は無限 (the sky's the limit)」であることが強調されている。ただし、ここでいう「平等」とはあくまで女性間のものであり、男性兵士との間には明確な一線が引かれたことには留意する必要があるだろう。

第3章 男性兵士は女性兵士をどう見たか

ATSの募集広告では、軍への入隊は「男性を前線に解放する」という最大の戦時貢献につながることで、また、給与や休暇といった待遇も申し分なく、軍隊生活も民間の職業と何ら変わらない、楽しくて充実したものであることが強調された。こうした募集広告に惹かれて軍への入隊を志願した女性たちに、男性兵士はどのようなまなざしを向けたのだろうか。軍隊の中で女性兵士と接触した男性兵士が、彼女たちをどうとらえ、どう評価していたのかに迫るには、史料上、大きな制約が

15 イラストのないバージョンが新聞にも掲載された。Lurgan Mail, 23 August 1941.



ある。男性兵士が家族に宛てて書いた手紙や戦後に執筆した回想録に断片的な記述はあるものの、読み手の存在を強く意識したこうした語りの中に、男性兵士の「本音」を読み取ることは困難だからである。そこで本章では、第二次世界大戦が勃発する直前に創設された世論調査組織「マス・オブザベーション (Mass Observation : 以下 MO と略す)」のアーカイヴに残る史料を手がかりに、第二次世界大戦中の軍隊で、男性兵士が女性兵士にどのような視線を向けていたのかを探ってみたい。

MOは「大衆 (mass)」の考えを政治に反映させることを目的として1937年に創設された。大戦の初期には、情報省と契約して戦争や戦時内閣に対する世論の動きを調査するなど、政府との間に一定の協力関係を築いた。しかし、MO内部の強い反対もあって政治と距離をおくようになった1941年以降は、独自の方法で様々な活動を展開した¹⁶。MOの世論調査は、網羅的かつ客観的なデータに基づくものではなく、人類学的手法を用いて行われた。全国から募集したパネリストを対象に実施されたアンケート、「オブザーバー」と呼ばれるヴォランティアによる潜入取材、パブや通りでの噂話の収集、さらには日々の暮らしを記した日記を提供する「ダイアリスト」の募集といったユニークな手法を通じて、MOは人々の日常に深く入り込んだ¹⁷。MOが収集を試みたのは、「世論」を構成する「普通の人々 (ordinary people)」の生活や価値観、考えであり、MOに寄せられたパネリスト、オブザーバー、ダイアリストの生の声は、軍隊の末端に位置する「普通の兵士」が女性兵士をどう見ていたかを知る上で貴重な史料となる。

1941年10月、MOは軍隊の中で、男性兵士が女性兵士にどのようなまなざしを向けているのかを調査している。それは労働大臣アーネスト・ベヴィンが、ATSへの「絶望的な志願者数」という現状を受け、女性徴兵の実施を戦時内閣に進言した時期でもあった¹⁸。女性徴兵という選択肢が現実味を帯びるなか、MOは軍の成員およびその関係者を対象に、女性兵士にどのような感情を抱いているか、また、妻や恋人といった身近な女性がATSに入隊することをどう思うか、といった内容の質問票を送付している¹⁹。調査依頼文には、「我々は軍の中で彼女たちが男性たちにどのように見られているのか、またそれはどのような理由に基づくものなのかを知りたい」と調査の目的が記され、数日以内の回答が求められた。MOの調査方法の特徴の一つは、この迅速性にある。MOが綿密かつ網羅的な調査を志向するものではなく、当時の世論の動向を即時的に把握することを目的としていたことがうかがえる。

MOが調査依頼をかけた範囲やその数は不明であるが、アーカイヴには上記の調査に関する報告書が40通、便箋にして計100枚ほど残されている。個人の印象や経験を記したごく短いものから、兵士へのアンケートやインタビュー結果に分析を加えたものまで、その形式や内容、調査の質にはかなりの幅が見られる。いずれの報告書も1941年10月から11月、遅いものでも12月の日付が記されており、かなり短い期間で調査が実施されたことがわかる。MOが収集したこれらの報告書は、

16 Penny Summerfield, 'Mass-observation: Social Research or Social Movement?', *Journal of Contemporary History*, vol.20, 1985, p.446; Dorothy Sheridan et al., *Writing Ourselves: Mass Observation and Literacy Practices*, Cresskill: Hamton Press, 2000, p.29.

17 MOの活動については、James Hinton, *The Mass Observers: A History, 1937-1949*, Oxford: Oxford University Press, 2013.

18 TNA, LAB 76/13, Women's Auxiliary Services, J.L. Brooke-Wavell, p.25.

19 MO, TC32-1-F, Male Attitudes to women in the Forces [MO, TC32-1-F], A Letter from MO to Mr. Fetherbridge, 14 October 1941.

同一の手法に基づく客観的な分析結果とは言いがたいものの、軍に所属している、もしくは所属した経験のある男性兵士に直接働きかけ、女性兵士に関する率直な考えを引き出すことに重きをおいた報告書として評価できる。

報告書全体の傾向としてまず指摘できるのは、ATSの女性兵士を積極的に評価する声のごくわずかしかない点である。肯定的な意見としては、「大多数はきちんとして気持ちがいい。彼女たちは自分たちの性別を売りにすることもなく、労働条件や任務内容について不平を言う者も見ることがない。軍の外での行動も模範的だ。私の恋人も数日前に入隊したが、彼女は強い個性と高い理想をもった女性だ」²⁰、「私は反対しない。彼女たちはATSでよく働いているし、男性を戦場のより活動的な任務に解放しているのだから」²¹といったものが挙げられるが、こうした声は全体の1割にも満たない。しかも、好意的な意見の多くは、妻や恋人など、身近な女性がATSに所属している場合に限られる傾向がある。

一方で、女性兵士という存在そのものへの反発や抵抗感は複数の報告書に記されている。「自分たちの仕事を奪ってしまう女性に対する男性兵士の反発はかなりある」²²との報告や、「男性が汚れ仕事、すなわち軍事物資の運搬や銃の手入れ、砲台の灯りの管理などをすべて担い、女性は楽な仕事ばかりを引き受けることになるだろう」²³といった意見に加え、女性が軍隊に入ってくることを「侵略」と表現するものもあった。また、女性の存在を「場違いなもの」、「兵士の真似事」、あるいは不自然なものともみなす傾向があったことも確認できる²⁴。さらに、「ATSへの入隊をピクニックだと思っている子もいる」²⁵、「大した仕事もせず、おしゃべりやお茶に時間を費やしている」²⁶といった批判には、女性兵士に与えられる任務は遊びのようなものでしかないという偏見が表れている。加えて、男性兵士がATSに言及するときは「くすくす笑う傾向」があるとか、「全体としてATSは一種のジョークとして見られている」といった指摘²⁷からは、ATSの女性たちがそもそも兵士として評価の対象とすらされておらず、多くの男性兵士が彼女たちを見下していた様子が見えがえる。

とりわけ強い批判が向けられたのは、女性兵士のモラルの低さであった。たとえば、「女性たちのモラルや、その清らかさも疑わしいときがある」²⁸、「教養が低く、下品でがさつである」²⁹といった評価がその典型である。また、酒に酔った女性たちの姿に嫌悪感を抱いたという声も寄せられた³⁰。また、ATSの末端を占めた若い女性兵士に対し、男性兵士はしばしば性的なまなざしを注いだ。

20 MO, TC32-1-F, Report on ATS by R. A. Done, Manchester, 21 October 1941, p2.

21 MO, TC32-1-F, Men's attitude to women joining ATS, Hampstead, 15 October 1941, p. 1.

22 MO, TC32-1-F, Soldiers' Attitudes to ATS, 10 November 1941, p.1.

23 MO, TC32-1-F, Soldiers feelings about ATS, by Undergraduate, Male, Age21, 19 October 1941, the 2nd sheet.

24 MO, TC32-1-F, ATS Report-Attitudes of Men, by H. Novy, RAMC Woolwich, p. 1.

25 MO, TC32-1-F, Attitudes of men to women joining ATS, p.6.

26 MO, TC32-1-F, ATS, 28 October 1941, p.2.

27 MO, TC32-1-F, Soldiers feelings about ATS, by Undergraduate, Male, Age21, 19 October 1941, the 1st sheet.

28 MO, TC32-1-F, ATS, 28 October 1941, p. 1.

39 MO, TC32-1-F, ATS Report-Attitude of Men, 29 September, 1941, p. 2.

30 MO, TC32-1-F, ATS, 28 October 1941, p. 3.



報告書には「便利な売春宿」³¹、「いちゃつきの相手」³²といった言葉が並び、ある報告書は「兵士のコメントの中で支配的なのはセックスに関するものである。低俗なコメントから〔女性兵士は〕セックスアピールという点で関心を持たれているとするコメントまで様々であるが、総じて彼女たちは不道徳で、多くが売春婦であるとみなされている」³³と総括している。

MO に送られた報告書の中には、男性兵士の会話をそのまま記録したものも含まれている。通りや飲食店、何らかの集まりなどにおいて、人々が実際にどのような会話を交わしているのかを観察するこうした手法は、「生の声」を拾うためにMO がオブザーバーに推奨した方法でもあった。「女性兵士に対する男性兵士の本音に迫ること」を目的としたある報告書には、オブザーバー自身を含む複数の兵士による会話の様子が記録されている。このオブザーバーはルートンに駐屯する部隊に所属しており、階級は兵卒と書かれていることから、軍の末端に位置する「普通の兵士」の一人といえる。彼は、友人と思しき22歳から24歳の5人の兵士に女性兵士に対する印象を尋ね、その内容をMO に報告している。会話は、女性兵士に対する性的ジョークから始まっている。

—ATS についてどう思う？

ジョージ：マットレスとしてはいいよ。

—それはわかってる。ATS という考えそのものについては？

ジョージ：うーん、強く反対するね。

—女性が制服を着ることに反対だから？

ジョージ：そう。…僕は女性が戦争に参加するのを見たくない。なぜそうしなければならないのか理解できない。家庭にいるほうがもっと役に立つだろう。

ハリー：彼女たちがやっているのは調理だけだ。

ジョージ：今は女性が高射砲陣地でも働いているよね、防空部隊とか。

ノビー：阻塞気球団 (barrage balloon) とか。

—その通り。でも、彼女たちがしている仕事ではなく、彼女たち自身についてはどう思う？

ジョージ：僕と一緒に働いている女性たちの中には最下層の女性はまったくいいことわかってる。でも、軍隊は彼女たちにとっては有害でしかない。

—どういう意味で？モラル的に？

ジョージ：まあ、そうだね。

—それなら君は軍隊が女性を淫らにしまうことに不満なんだね。

ジョージ：彼女たちが一体誰と一緒にいるのか見てごらんよ。陸軍の約85%は汚らわしい年寄りばかりだろう。

—もしくは汚らわしい若い男たちか。

ジョージ：そう、おそらくね。

ボブ：もし君がATS に関する僕の意見を聞きたいのなら、僕は全体として悪くないと答えるよ。

31 MO, TC32-1-F, ATS Report-Attitudes of Men, by H. Novy, RAMC Woolwich, p. 14.

32 MO, TC32-1-F, Soldiers feelings about ATS, by Undergraduate, Male, Age21, 19 October 1941, the 1st sheet.

33 MO, TC32-1-F, Soldiers' Attitudes to ATS, 10 November 1941, p.2. [] 内筆者。

—これまで本当にレスpekタブルできちんとした少女を見たことがある？

ジョージ：あるよ。でもとても少数だ。

ハリー：彼女たちには適切な家庭がないから、もしくはそこから出たいと思っているから軍隊に入るんだ。

ボブ：平時に軍隊に志願してくる大抵の人と同じだ。

ハリー：僕は女性が戦争に関わるのは反対だ。³⁴

女性兵士の性モラルの低さを批判するジョージのような人物から、女性兵士に比較的好意的なまなざしを向けるボブのような人物まで、この会話に加わっている男性たちの女性兵士観には濃淡が見られる。彼らは、女性兵士が軍隊で一定の役割を果たしていることについては認めているものの、「軍隊は本来、女性がいるべき場所ではなく、女性は家庭でこそ役に立つ」という考えを前提に会話している。また、軍に入隊した女性すべてが性的に墮落しているとは言わないまでも、軍隊あるいはその環境が女性の性モラルを低下させるという認識を彼らが共有していることもわかる。

ウーリッジの陸軍医療部隊に所属する H.M. という人物は、女性兵士に遭遇したさいの兵士たちの反応を以下のように報告している。

制服 (uniform) 姿の少女やその集団が兵士たちのそばを通りかかると、同じ行動がとられ、同じ言葉が聞かれる。近づいてくる彼女たちの顔を見て、微笑みながらすれ違う彼女たちの脚を見て、軍服 (khaki) のタイトスカートの下で揺れる彼女たちのお尻を見て、総じて次のような陽気なコメントを交わすのだ。「悪くないな」、「ナイスな作品だ」。…ときには叫び声や笑い声がすることも。これは兵士たちが彼らだけで気ままに過ごしているときに大多数がとる一般的な態度といえる。…全体として、制服を着た女性、特に ATS をめぐる議論はセックスに関連しており、彼女たちは「ヤル女」と「ヤらない女」という2つのカテゴリーに峻別される。前者は商品として論評され、他に良いものがなければそれで良しとされ、後者は一般に高慢で無愛想な女として却下される。…インタビューや観察から推測するに、軍服を着た女性というのは、あまり人気のある商品ではないものの、商品であることは確かなようだ。³⁵

報告者は、ATS の女性たちは有能で、与えられた仕事を問題なくこなしていることは理解しているとしながら、若い女性が軍隊にいることそのものが彼女たちの評判を落とす原因になっていると指摘する。特に批判的なまなざしが注がれたのが、彼女たちが着用した制服、すなわち軍服であった。報告者は「人々は軍服が好きではない。好きだという人に会ったことがない」と自らの見解を記している。人々が「好きではない」のは、男性のみが着用すべき神聖な軍服を女性が着用することであり、女性による軍服の着用が兵士の「男らしさ」を侵犯するものとして批判的にとらえられていたことがうかがえる。

また、この報告書には男性兵士 50 人を対象としたアンケートとインタビューの結果も記載されている。まず、「ATS についてどう思うか」という質問に対しては、「あまりよくない」、「不道德だ」、

34 MO, TC32-1-F, ATS by Private D. W. Argent, 18 October 1941, pp. 1-5.

35 MO, TC32-1-F, ATS Report-Attitude of Men, H. Novy, RAMC Woolwich, pp. 1-2, 4.



「ひどい」といった否定的な回答が全体の60%を占めた。「悪くない」と回答したのは16%で、「有益だ」、「良い」は10%にとどまった。次に「あなたの妻をATSに入隊させたいですか」という質問に対しては、「入隊をやめさせる」、「絶対にありえない」、「好ましくない」、「嫌だ」といった否定的な意見が92%にのぼった。「気にならない」と答えた4人は近親者がすでに入隊しているケースだったという。妻を入隊させたくない理由としては、「不道徳、不潔」が44%でトップを占めており、女性兵士のモラルに関する評判の悪さがそのイメージを低下させていることがうかがえる。次に多かったのは「家をあけることになる」、「軍には十分な人員がいる」というもので、全体の28%を占めた。また、「妻や恋人が入隊するとしたらどの部隊がいいと思うか」という質問に対しては、軍隊の中では海軍が24%と最も多かった一方で、「どこであってもダメ」との意見が52%と半分強を占めた。報告書の最後はATSに対する提言で締め括られている。そこでは、「男性には妻や恋人に働くことを勧める用意はあるものの、彼女たちが陸軍に入るとなると必死で抵抗する」として、ATSの評判を上げるためにも、人員規模を絞って質を上げること、女性に適した事務仕事や家事は労働省の管轄下で働く民間人の女性に委託すること、既婚女性はできるだけ家においておき、夫が休暇に戻ったときや動員を解除されたときに家にいられるようにすることが提言された。

女性が軍隊に入ることに否定的な兵士たちがしばしばその理由として挙げたのは、軍隊が「女らしさ」を奪ってしまうからというものであった。自らを「普通の兵士 (ordinary soldier)」と表現するあるオブザーバーも、「もし私に恋人がいたら、ATSには入ってほしくないと思うに違いない。…それは女らしさ、すなわち男性が魅力的だと感じるものを奪ってしまう。…女性は兵士ではないし、ATSは陸軍ではない。彼女たちをそのようなものにしようとするのは間違っている」³⁶と報告書に記しており、こうした考えが典型的なものであったことがうかがえる。また、もともと性モラルの低い女性が軍隊に引き寄せられているという見方がある一方、「意思の弱い女性が軍隊に入れば容易に墮落してしまう」³⁷、つまり軍隊という場が女性の性モラルを低下させるという考えも広く共有されていたことがわかる。

MOの報告書に記録された男性兵士たちの「生の声」には、女性兵士を過度にセクシュアライズしてとらえた発言が少なくない。彼女たちは兵士の性の対象として認識されており、女性兵士を評価する際の基準も、兵士としての能力や軍隊への貢献度ではなく、「性モラル」に置かれていた。そこには、「女性による軍の侵犯」という現象を、一部の墮落した女性による例外的な逸脱として処理しようとする心理が働いていたと考えられる。猥雑な話で盛り上がる兵士たちの様子からは、女性兵士が性やからかいの対象として蔑んでもよい相手とみなされていたことだけでなく、ミソジニーを媒介とした兵士同士のホモソーシャルな結びつきの強さを読み取ることができるだろう。

おわりに

女性兵士の存在は、軍隊や戦争遂行にどのような影響を与えたのだろうか。女性の軍事動員の最

36 MO, TC32-1-F, ATS Behaviours, 22 October 1941, pp. 3-5.

37 MO, TC32-1-F, Report on ATS by R. A. Done, Manchester, 21 October 1941, p. 3.

大の目的は、それまで男性が担ってきた軍務の一部を女性に代替させることで、前線の兵員を確保することにあった。第二次世界大戦中に陸・海・空軍へ動員された女性兵士の総数は60万人にのぼり³⁸、そのうち12万5,000人は徴兵法に基づいて強制動員された³⁹。軍隊という場で兵士としての身分を得た女性たちは、第一次世界大戦とは比較にならない規模で、より直接的に軍事に関与したのである。戦争の長期化に伴い、徴兵法の適用範囲が拡大していくなかで、若い女性兵士は、男性兵士の「男らしさ」を鼓舞し、軍の士気を保つ上で重要な役割を果たした。他方で、女性兵士は軍隊という「男の聖域」を侵犯する恐れがあったため、その役割は非戦闘任務に限定され、男性兵士とは明確に区別された。男性兵士が女性兵士に性的なまなごしに向けたのは、厳しい軍隊生活の中で、彼らが単に息抜きや娯楽を求めたからではない。MOに寄せられた報告書が示すように、そこには女性兵士に対する明らかな偏見と排除の意識が存在していた。女性兵士を自分の身近な女性、すなわち「女らしさ」を保持した女性と区別してとらえることで、男性兵士はその存在を例外化し、「性モラルが低い」というレッテルを貼ることによって伝統的なジェンダー規範を守ろうとした。女性兵士の存在は、結果的に軍隊におけるホモソーシャルな男の連帯を強化する方向に作用したのである。

さらに、軍隊への女性の参入は、「男らしい任務」と「女らしい任務」という形で軍務のジェンダー化をもたらし、「戦えない存在」として男性兵士の下に位置づけられた女性兵士は、軍が理想とする兵士像＝男性性を際立たせ、これを強化する役割を担った。第二次世界大戦は、女性徴兵の実施と男女混成防空部隊の創設に象徴されるように、戦争行為における男女の境界が曖昧化した戦争でもあった。戦闘行為の定義が揺らぐなか、軍務には優劣がつけられ、性別役割と結びつけられた。女性の中ではATSの一般隊員より防空部隊に志願した女性の方が、防空部隊の中ではATSから志願した女性より高射砲を操作する男性の方が、そして、男性の中では防空部隊で迎撃任務を遂行する者よりも前線で戦う若く体力のある男性の方が、それぞれ優位に置かれた。このように、性別と軍事的貢献の程度によって、軍隊のヒエラルキーは再構築されたのである。

軍の正規の成員として第二次世界大戦を戦った女性兵士たちは、戦後どのように歴史の中に位置づけられたのだろうか。戦後のイギリスで掲げられた「常態への復帰 (Back to Normal)」というスローガンは、経済や生活の再建だけでなく、ジェンダー秩序の回復をも含意するものであった。第一次世界大戦と同様に、戦後のイギリスでは多くの戦争記念碑が建立されたが、陸・海・空軍における女性の軍事動員、とりわけ迎撃任務を遂行した防空部隊への動員は、こうした大戦の記憶の枠組みから排除され、おそらく意図的に忘却された。ロンドンのホワイトホールにある「セノタフ (cenotaph)」という記念碑は、第一次世界大戦の戦死者を追悼する目的で建てられたものであるが、第二次世界大戦が終結してまもなく、その戦死者も対象に加えられた。他方、セノタフの北側に「第二次世界大戦期の女性たち (The Women of World War II)」という記念碑が建てられたのは、戦後

38 *Parliamentary Papers*, 1946, cmd. 6832, xv, Strength and Casualties of the Armed Forces and Auxiliary Services of the United Kingdom 1939-1945.

39 Jeremy A. Crang, "'Come into the Army, Maud': Women, Military Conscription, and the Markham Inquiry', *Defense Studies*, 8 (3), 2008, p.388. ただし、陸・海・空軍の女性部隊の他に、軍需工場や民間の防衛組織も徴用先の選択肢に含まれていた。



60年が経過した2005年のことである。それは元ATSの女性兵士たちによる働きかけの成果であったが、運動の過程では顕彰の対象が軍人にとどまらず、軍需工場や民間の戦時組織で働いた女性にまで拡大されるという紆余曲折があった⁴⁰。戦後60年を経てもなお、女性兵士を国家の中心的な「記憶の場」であるホワイトホールで顕彰することに対し、社会の中に根強い抵抗感が存在していたことがうかがえる。セノタフが軍人を対象とする記念碑として認識されたのに対し、「第二次世界大戦期の女性たち」は軍人と民間人を等しく顕彰の対象とするものであった。つまり、両者は同じ空間にありながら、けっして対をなすものではなく、女性一般が顕彰の対象とされることによって、「女性兵士」という存在は巧妙に不可視化されたのである。これら二つの記念碑に見られるジェンダー非対称性は、戦後という長い時空間の中で、いまなお軍事的ジェンダー秩序を保持しようとする社会的な力が働き続けていることを示している。

【付記】本研究はJSPS科研費（課題番号23K00896）の助成を受けたものである。

40 女性兵士の記念碑の設立をめぐる経緯については、拙稿「『忘れられた軍隊』—第二次世界大戦の記憶とイギリス陸軍防空部隊の女性たち—」『関学西洋史論集』第46号、2023年。

